



平成17年度版「こくご」二年(下)
六 お話を楽しもう
「スーホの白い馬」
おおつか ゆうぞう 作
リ＝リーシアン 絵

「スーホの白い馬」の挿絵を描いてもう一年余りになりますが、私の頭の中ではずっと、スーホが草原で馬頭琴を弾いている場面と、あの強靱不屈の小さな白い馬、そしてあの勤勉善良な老婆の姿が駆け巡っています。私は思うのです、スーホは草原の牧人の崇高な精神の象徴、白い馬は正義と勇敢の化身だと。

かつて私は、草原の農村で二十年余り生活したことがあります。スーホと白い馬の物語は草原に広く伝わっており、私はこの古い物語に心の底から感動を覚えました。昨年、この物語の挿絵を何枚か描き、私は再びこの感動的な物語に心を打たれ、草原での出来事が心の中にこたまとなって響いてきました。

当時、草原のパオの中で、牧人はいつものように「哈那」（パオ内の側面にある木の骨組み）に掛けてある馬頭琴を外し、一曲、また一曲と続けて弾いてくれました。その琴の音は泣くように訴えるように、もの悲しくパオ内を漂い、果てしなく広い草原に響きわたりました。目を閉じて精神を集中させると、琴の音色と同時に、遠くの地平線がしだいに近づいてきて、やがて一つの白い物影がはつきりと現れてきました。小さな白い馬が帰ってきたのです。年若いスーホを乗せた白い馬の動作はすばしく、雄姿は光り輝いています。前を疾走する馬

の群れを追い抜き、草原の奥へと駆け抜け、空の果てに消えます。あとに残ったのは、あの不変の、はるか遠くの琴の音色と、草原に代々伝えられたスーホと白い馬の物語です。牧人の変転（出会いと別れ）と浮沈（喜びと悲しみ）を訴えるこの琴の音は、彼らの理想と希望を託した、牧人の心に流れる河なのです。草原でよく知られているこの物語は、何代にもわたって伝えられ、天と大地と牧人の血の中で融合し、草原に生きる精神の源となっているのでしょう。

馬頭琴が伝えられて現在までおよそ千三百年の歴史があります。北宋の歐陽脩の詩には「奚琴本出奚人樂」（奚琴は奚人樂から生まれた）という句があります。この「奚琴」とは、かつての東胡の庫真奚族の馬頭琴を指し、「清史」の中では、馬頭琴とは二十一本の馬の尾の毛で成るものといっています。

白い馬については、牧人は心の美神と考えていました。昔、私も一頭の白い馬に乗ったことがあります。その馬はよく人間の気持ちを理解していました。ある夜の帰り道、道に迷ってしまった私は牧人の言いつけを思い出して、手綱を放してただまたがり、行く手を馬に任せました。すると、真夜中過ぎ、シルエトのように野営地が目前に現れたのです。そのとき、私はこの白い馬にどう感謝すればいいのかわかりませんでした。それはスーホの白い馬の生まれ変わりだと思いました。

現在、絵を描くときはいつも部屋に香を焚いて、私の思いを託しています。そのたゆたう煙は雲のようにスーホの故郷へ向かって漂います。こうして思いをはせると、スーホと白い馬の伝説は、馬頭琴にま



すまず神秘的な色合いを添えます。あの青空の白雲の下から響きたる馬頭琴の音色を聞かされたら、私の心は慰められ、満たされた気持ちになります。大草原は素朴な生命の息吹を放ちながら、無防備で、飾るところがなく、かつ限りなく透明で、底まで見えるほどに澄みきっています。草原での生活は、私に、誠実と寛容を教えてくださいました。同時に、人と人との間でいちばん美しいもの——真心——を感じ取らせてくれました。このことから、絵を描くのいちばん重要なものは情感であり、自分が表現する生活の原点に感情を満たすことであると、それまで以上に考えるようになりました。それによって、心境と画境の調和を追及し、芸術と自然に対してより深く考え理解することが可能になるのです。大草原——それは、私が人生を送り、絵を描いていくうえで、尽きることはない教訓を与えてくれました。

私は日本の子どもたちに言いたいのです。愛することを学びましょう。そして、自分を愛し、家族や友達を愛し、周りの環境を愛し、日々の生活と足元すべての土地を愛しなさい。あなたの心に愛さえ満ちていけば、生活がいかに美しいものか気づき、伝説の中のスーホのように寛容で心豊かに、あの白い馬のように勇敢で強靱になれるのですから。

